

---

# エロ本焼却祭り

谷津矢車

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

口本焼却祭り

### 【Zコード】

Z5418E

### 【作者名】

谷津矢車

### 【あらすじ】

中学校の頃から片思いしていた女の子に振られた「僕」。その「僕」は、たまたまその女の子が男の人と歩いているのを目撃する。その後、「僕」は彼女がアルバイトをしているコンビニまで、バイクを走らせた……。高校生男子の姿をかなり乱暴に書いた、怪しき駄文です。

「「めんなさい」

あの子の口からこの言葉を聞いたとき、初めて僕は“罪の無い謝罪”を知った。高校生の頃だった。

「別に、あなたの方が嫌いなわけじゃないんです。でも……」

まるで、自分に罪があるんです、と言いたげに顔をしかめ、制服姿の彼女は頭を下げた。そのとき、彼女のトレードマークとなつてゐる、まるで男の子のような短髪が、柴犬の毛色のように輝いた。柴犬を連想したせいだらうか、僕は彼女の頭を撫でたい衝動に駆られた。事実、手を伸ばした。でも、僕の手はまるで見えない壁に遮られるように、彼女の柔らかそうな髪の毛には届かなかつた。

謝られてゐる間中、僕はずつと彼女の髪の毛を、僕が本当に大好きだつた、茶色がかつた髪の毛を見ていた。彼女の謝罪の言葉は聞こえなかつた。僕が真剣に恋した、あの茶色の髪の毛を、ただ目に焼き付けていた。

「それじゃ……」

彼女は、謝罪をするだけして僕の答えを待たないまま、そそくさと体育館裏から去つていつた。女の子特有の、甘いにおいを残して。今にして思えば、あの子は卑怯だつた。

空を見上げた。

青い空に白い雲。言葉にすればただそれだけの空の色だつた。けれど、次第にその空の光景が歪んでゆく。まるで、鏡のよう滑らかな水面に、石を一つ投げ込んだかのよう。あるいは、田舎を差したときのよう。どうやら、後者の表現の方が、僕のこの時の状況を見事に表しているらしかつた。

僕は、体育館裏の壁に寄りかかり、そしてずるずると座つて、ただ泣いた。

薄暗い体育館裏で、まるでこの世を睨みつ悪魔のよう、泣いた。

学ランをハンカチの代わりにして、泣いた。そういえば、ティッシュの代わりにもした気がする。でも、とにかく、泣くに泣いた。

そんな僕の横をトカゲが横切った。

こんな風にして僕は失恋した。繰り返すけれど、高校生の頃だ。

「そつかあ、ダメだつたか

「ああ

タダシは、道に寄り沿うように立つ壁に区切られて、長方形に切り取られている空を仰いだ。すごくバツが悪そうにして、僕の横を歩く。壁の横に立つ電信柱に向かって、僕は石を蹴った。その石は電信柱に当たつたけれど、まるで何事も無いかのように電信柱は立っていた。なんだか、電信柱にまで馬鹿にされたような気がした。

今にして思えば、女の子に振られたがために肩を落とし、通学路を歩く高校生なんて、傍から見ていても本当に情けなかつただろう。「まあ、そんなに気を落とすなよ。女なんて、男の数だけいるんだから」

そう、タダシは遠慮がちに言つた。

「……」

僕は、何も言わなかつた。そんな僕に、タダシは景気付けでもするかのように、さらに言葉をかけてきた。

「あ、そうだ！ 今度合コンやろう！ ほら、南高のマユミつているだろ？ アイツに話を振れば、きっとメンツを取り揃えてくれるつて！ 女なんか、星の数ほどいるんだから」

僕のことを励まそうとしてくれるのは判る。でも、その言い草に腹が立つて、思わず怒鳴つてしまつた。

「女は星の数ほど居るかもしれないけど、あの娘はこの世界に一人しかいないんだよ！」

僕の言い分にタダシはため息をついた。

「まあ、わかるよ」

「お前に僕の

僕の怒鳴り声を遮つて、タダシは続けた。

「わかるよ。だって、お前との付き合いも、もうそろそろ10年を超えるんだからさ」

タダシと僕は、端的な言葉を使ってしまえば、腐れ縁だった。

小学校1年の入学式にて派手な喧嘩をして以来、タダシとは同じ小学校を共有したし、同じ中学校を共有したし、高校まで共有する羽目になった。僕は、あんまりタダシのことを友人として意識しているわけでもないし、きっと向こうも僕のことを意識しているわけではないだろう。でも、気づけば僕のことを一番理解しているのはタダシだ、ということになってしまったし、タダシのことを一番理解しているのは僕だ、ということになってしまった。世間一般ではそういう関係のことを“親友”という言葉で括るらしいが、どうにもそういう言葉でタダシのことを括るには抵抗があった。親友、というほどには、僕はタダシを不可欠に思つていないし、タダシもまた同様だろう。

事実、僕とタダシは性格がまるで違うし、学生としてのあり方も微妙に違う。僕はどちらかといつと制服をびしつと着る学生なのに対して、タダシは制服の下に赤いTシャツを着てしまうようなタイプのヤツだ。腐れ縁でもない限り、こうやってあれこれ話すような関係にはなりえなかつただろう。

「まあ、お前つてけつこう思いつめるタイプだからな」馬鹿にするようにタダシは言った。「それにお前、中学校の頃から、あの子にご執心の模様だつたからな」

「ご執心つて……、わざわざそんな難しい言葉を使わなくても」

タダシは、悪戯っぽく笑つた。

そう。僕が告白した女の子、便宜上「Tちゃん」と呼ばう、  
は、僕の初恋の人だつた。

あの人に初めて出会つたのは、中学校の二年生の頃だつた。たまたま同じクラスになつて、たまたま隣の席になつた、という、運命なんてまるで感じさせない出会い方だつた。

でも、僕は彼女に魅了された。授業中、先生の話に飽きては彼女の顔を盗み見ていた。いつも彼女は、僕のことなど意に介さないよう、前を向いていた。実は、そんな彼女の横顔があまりにキレイすぎて、僕は彼女の顔そのものは見ていなかつた。いつも、彼女の茶色がかつたボーカルショウな短髪を眺めていた。

そんなTちゃんとは、中学の三年の頃には別のクラスになつてしまつたけれど、でも、彼女のことが気がかりで、彼女に関する話を、それなりに集めていた。その中に、"Tつて、兵高が第一希望らしい"という情報があつた。兵高というのは、僕の住んでいるあたりではけつこう有名な進学校で、正直僕みたいな頭のヤツが入れるような高校ではなかつた。でも、人間死ぬ氣で頑張ればどうにかなるものだ。一年生まではそれこそ墜落寸前の飛行機のような軌道を描いていた僕の成績が、急にスペースシャトルの高度にまで跳ね上がつた。そうして彼女と同じ高校の受験を受け、そして首尾よく同じ高校に進学したのだつた。

なのに。なのに、振られたのだ。僕は。

「つうかよ、タダシは呆れ顔で言つた。『そういう昭和な考え方、どうにかならねえか？』

「昭和な考え方、つてなんだよ？』

「簡単だ」タダシは指を振つた。『『あの人人が好きで好きでたまらないの！あの人人に操をささげちゃうの！』』みたいな考え方さ

後半、タダシは体をクネクネさせながら、誰かを抱きしめるような仕草を見せた。ああもう、そういうことを、通学路でやつて頂きたくないものだ。道を歩く小学生はアホ面下げて僕らの顔を覗き見るし、同じく道を歩く大人なんて、明らかに僕らから視線を外した。タダシの姿を見て、さつきと変わらないリアクションを見せていたのは、電信柱くらいのものだう。

けれど、クネクネと腰をくねらすタダシを見ながら、コイツはいなあ、と思つた。

きつとタダシは、僕のように女の子に振られても、『ま、そういう

うこともあるよね”つて次の女の子に突っ走つていけるヤツなんだ  
う。そして、“昔、あんな女に惚れちゃつてさ”とネタにするこ  
とさえ出来るのだろう。でも、それはきっと僕には出来ない。ただ  
一人、想い続けた人にだけ想いを捧げ、そして振られてもなお、こ  
うして引きずるんだう、と。

「ま、とにかく。振られたんだからしようがない。もう、あの女  
のことは諦めるんだな」

「諦める？」

余りに僕にとつては意外な提案だつたものだから、思わず声が上  
ずつてしまつた。それを嗤うように、タダシは言った。

「判つてねえよなあ。女、つて生き物はさ、一度“ダメ”つて言つ  
たものに対しては、一生ダメつて言い続ける生き物なんだよ」

そうやって、女の子の心理をぶてるほど、タダシは女の子と深く  
付き合つているのだろうか、と僕はふと思つた。でも、その答えは、  
案外すぐに知ることになる。でも、まだ、この時の僕は知らない。

そうやってダラダラと喋つてゐるうちに、駅に着いた。僕とタダ  
シが同じ中学校（ついでに言えば、僕が好きだつたTちゃんも同じ  
中学校出身）だつた、といふのは話したと思つけど、僕の住んでい  
るところは、学校の最寄り駅から30分ほど電車に揺られたところ  
にある。当然、僕と同じ中学校出身のタダシも、僕の家の近辺にあ  
る。だから、同じ駅を使つてゐるし、通学に同じ電車を使う。

「そう、しょげるな、つて」

タダシはs u i c aで改札を通りながら僕の方に振り返つて言つ  
た。僕も、タダシに続いて改札を通り。s u i c aの、ピッ、とい  
う電子音さえ、なんだか僕のことを馬鹿にしてゐるようになつて聞こえた。  
電車の中でも、僕は沈んでいた。

振られた直後に明るくしろ、つていうのに無理があるので。な  
にタダシは、「いい加減振られたことを引きずるな」「新しい女を  
搜せばいいじゃねえか」「昭和なマインドを捨てろ」「そもそもお  
前、昭和顔なんだよ」「つうか、ネクラなんだよ」などの言葉をぶ

つけてくる。……最初は励ましたのかもしれないけど、そのうちなぜか僕に対する罵倒に変わっているのが不思議で仕方が無かつた。

そうして、僕らを乗せた電車は、降りる駅の1個前の駅で、扉を開いた。

思わず、反射的に開かれたドアの外に目を遣つた。

と、いうのも、昨日まで、こつやつて開いたドアの向こいつ、つまりはこの駅のホームを見るのが習慣だったからだ。

実は、Tちゃんが使っている駅が、この駅なのだ。Tちゃんの住んでいところと僕の住んでいところは（同じ中学校だったといつても）かなり遠くて、降りる駅まで違つてしまつのだ。

そう、電車がこの駅に着くと、彼女がいかと彼女を探すのが、僕の日課だったのだ。気持ち悪い？　ああ、その通り。でも、不思議なもので、そうやって探していらうちは、まるで彼女の姿は発見できなかつた。今にして思えば、それは何かの思し召しだつたのだろう、と思う。

とにかく、いつもの要領で、僕は駅のホームを見てしまつたのだ。もう、意味の無い行為だというのに。

でも、なんと、そのホームに彼女が歩いていた。

あの、茶色の、まるで柴犬の毛のようく柔らかそうな短髪をたなびかせて。さつき、僕を振つたことなんて意に介していないかのよう、しゃんとして歩いていた。

けれど、そんな彼女の隣には、男がいた。

僕より10センチは大きいだろうか。しかも、僕より100倍はかつこいい。僕が着たら七五三のようになつてしまいそうなジャケットをスタイリッシュに決め、僕のお小遣いの5ヶ月分じゃ買えなさそうな時計をはめていた。

けれど、そんな男のことなんか、どうでもよかつた。むしろ、僕がショックだったのは。

あまりに、彼女がきれいだった。

彼女が、男を見たときの何気ない表情。ちょっと目を外したときの、何とない表情。そして、男の話に同意するときの、完璧な笑顔。あんな笑顔、僕は見たことがなかつた。

ずっと、Tちゃんのことを追いかけていた。でも、あんな真つ直ぐな笑顔、見たことが無かつた。いや、見たことがなかつたのではないのだろう。きっと、彼女が僕には見せてくれなかつた笑顔だつたのだろう。そして、僕には、見る権利のない笑顔だつたのだろう。

「あちゃ～」

タダシは頭を搔いた。ふとタダシの顔を見ると、Tちゃんたちの様子を見て苦々しい顔をしている。きっと、タダシにも目に入ったのだ。

「あれ、加藤先輩だよ」

「加藤先輩？」

訊いた事のない名前に、僕は首を傾げた。

「ああ、今年の春に卒業した先輩だよ。ほら、卒業式のとき、スピ

ツツの“空も飛べるはず”をカバーした先輩たちがいただろ？」

居た。確かに卒業式の一次会で、ロツク調に改造した“空も飛べるはず”を演奏した三年生の先輩方が居たはず。その人たちは皆、もう大学生のはずだ。

そう思い出す僕の横で、タダシは続けた。

「その先輩達のバンドの中で、ドラムを叩いていた人だよ。確か、水泳部に所属していたはずだ。っていうか、あの人、水泳の世界では有名らしいし」

水泳部？　ああ、Tちゃんが所属している部だ。

「加藤先輩、確かにすごい気さくで優しい人だよ。俺だって、よく世話になつたし。それにあの人、すげえ手品が得意でな……」

ほう、僕より10センチは身長が高いのに僕より100倍はかっこよくて、スピツツの“空を飛べるはず”をハイテンポで叩き、水泳部に所属していてしかも水泳が上手い模様、しかも気さくで優しくて、手品が趣味……。Tちゃんの横を歩く加藤先輩なる青年の姿

と、そのタダシの評が、どうにも結びつかなかつた。

なるほど。けれど、ようやく全てを飲み込んだ。

その僕が飲み込んだ言葉を、タダシが先回りして言つてしまつた。

「なるほどな、あいつら、付き合つてゐるのか

そうとしか思えない。

きつとTちゃんは、同じ部の先輩である加藤先輩のことを、好きになつてしまつたのだ。タダシが言つには“気さくで優しい”“手品が得意”な加藤先輩に。そして、付き合つていたのだ。僕はそんな基本的なことさえ知らずに、彼女に告白してしまつたのだ。

僕は、ピエロだったのだ。

電車内に、ようやく発車を知らせるベルが鳴り、ドアが閉まつた。そして、少しずつ動き始め、どんどん景色を後ろに追いやつてゆく。加藤先輩の横で嬉しそうに笑うTちゃんたちも、どんどん後ろに追いやられていく。そして、彼女たちが歩いている駅のホームが遠ざかつていつた。

「……ま、なんだな」バツが悪そうにする必要も義務もないのに、つり革を弄びながらタダシはバツが悪そうにした。「……これで、踏ん切りがついたろ？」

踏ん切り？ つきそうも無かつた。

そんな僕に、タダシは顔をしかめながら続けた。

「まったく、にしても、あの女、もう少し考えやがれつてんだ。こんな、誰かに見られかねないとこで男と連れ立つて歩くなよ」まるで、“男を振つたあとにドートなんかするなよ”と言つたげな、タダシの口調だつた。

タダシと別れて家に帰つてからも、やつぱり諦めがつかなかつた。3年も片思いをした相手だ。そう簡単に諦めがつくものか。

ふと、ベッドに寝転がつていた僕は、時計を見た。デジタル表記で、午後の5時を示していた。壁にかかるカレンダーも見た。木曜だつた。

木曜の午後5時から、Tちゃんはここからバイクで10分ほど離れたコンビニでレジ打ちのアルバイトをしている、と小耳に挟んだことがあった。

その瞬間、僕の頭に、妙な電気が流れた。

「……よし」

僕はベッドから起き上がると、机の脇の棚から、バタフライナイフを取り出した。通販で買ったやつだ。昔は不良少年がファッショング代わりに買って問題を起こしたことがあつたらしいから買うのに難儀したけれど、でも兄貴の名前で買ってしまえば大したことになかつた。ともかく、そんな虎の子のバタフライナイフをズボンのポケットに入れ、机の上に置かれた財布を手にとつて、部屋を出た。リビングには誰もいなかつた。我が家は家族たちは皆働いているから、この時間の我が家はガランドウなのだ。そして、リビングの、いつも父親が座る椅子の前に立つた。父親はヘビースモーカーの上に頑固な人で、家族が文句を言うのにも関わらず、こんな特等席でタバコを吸うのだ。当然、そこには灰皿が常備されていた。そして、ここは父親という人間の面白いところなのだけれど、家ではライターを使わなかつた。父親曰く、「ライターというのは、見せびらかすためにあるものだ」。だから、家ではライターを使わず、マッチを使つてている。

実は、用があつたのは、そのマッチだつた。

そのマッチを手に取つた。明らかに飲み屋、しかも女の子が酒を注いでくれそうな名前の店のマッチだつた。それを取り上げて、胸ポケットに入れた。

そして、鍵置き場からバイクの鍵を取り、玄関で靴を履いた。彼女に、会いに行こう。そう思つた。

バイクを走らせること10分。遂に、彼女が働いているコンビニに着いてしまつた。

コンビニの駐車場に入つてバイクから降りると、フルフェイスの

ヘルメットを脱いで、左手に抱えて持つた。

そして、僕は気取りもせずにコンビニに入った。

「いらっしゃいませ」

女の子の声が響いた。その声は、どこまでも突き抜けていきそうなくらいに明るい声だった。ふとその声の主を探すと、その主は果たして、Tちゃんだった。Tちゃんは僕の方を見ていなかつた。販売しているタバコを補充しているところで、僕のことなんて見ていなかつた。

僕が入つたとき、ピンポンと鳴つたから、きっと彼女は僕の姿を見ていらつしゃいませを言つたのではなく、むしろピンポンの音に對して、反射的に挨拶の言葉を述べたのだろう。

でも、彼女はバイト中でも、僕をひきつける何かがあつた。あの横顔、そして、あの茶色い柔らかそうな髪。それだけは、コンビニ

の制服を着ていても隠しようが無かつたようだ。

コンビニの中は、案外閑散としていた。どうやら、午後の五時に仕事が終わるなんていう人種は、この日本では少数派になつてしまつたのだろう。

商品を物色する振りをしながら、僕はコンビニの様子を眺めた。閑散とするコンビニには、僕しか客は居なかつたし、店員も彼女しかいなかつた。きっと、バックルームの方には他の店員がいるのだろうけれど、しばらく出ではこないだろ。

好都合だ。

僕は、行動を開始した。

本のコーナーまで移動した僕は、“18歳未満禁止図書”的一角に入った。その中の本、つまりは工口本を一冊手に取り、そそくさとレジに向かつた。レジに向かつ途中にふとその表紙を見てみたところ、「可愛いお姉さんは、好きですか」と、昔Tで流れていた何かのCMのような惹句が躍つていた。

「いらっしゃいませ」

僕の気配に気づいたのか、Tちゃんがレジに立つた。

今日、自分が振つた男が眼の前に立つていうの、彼女は

驚いた様子も困ったような様子も見せなかつた。普通の客と変わらない応対振りを見せた。

僕は、エロ本を彼女の前に置いた。「可愛いお姉さんは、好きですか？」と、エロ本はTちゃんに向かつて訊いていた。

けれど、彼女はそんなエロ本のことも僕のことも田に入らないかのように、黙々とレジ打ちをした。

「680円です」

彼女は、どこまでも事務的にお金を要求した。彼女に言われるがまま、僕は1000円札を出した。

「1000円ですね、お預かりします」

彼女はエロ本をビニール袋に入れた後、まるでブラインドタッチのよう液晶画面を眺めながらレジを操り、お釣りを僕に寄越した。僕は、エロ本が入つたビニール袋を手にとつて、彼女に背を向け、コンビニを後にしようとした。そして、自動扉が開くか開かないかの、一度そのときだつた。

「サイマー」

小さな声で、彼女は言つた。

けれど、僕はそんなこと意に介さず、コンビニを後にした。

彼女の、「ありがとうございました」という声は、聞こえなかつた。だから、彼女が言わなかつたのか、それとも言つてくれていたのに僕の方が聞き取れなかつたのかは最早判らなかつたし興味もなかつた。

バイクが、夕方の道をひた走る。

その上に跨りながら、僕はなんだか清々しかつた。

きっと、これで彼女の記憶に、僕という人間が居座るのだろう、きっと、これで彼女は、これから僕の知らない男を振るたびに、僕のことを思い出す。“振つたその日に自分の働いているコンビニに来て、エロ本を買っていく男”なんて、そつそつ忘れられるものでもないだろう。

これは、ささやかな復讐なのだ。

僕を振った、彼女への。

でも、実は、僕が一番したかったのは、彼女の記憶に僕を刷り込ませる、なんていうまどろっこしいことではなかつた。だつて、そんなことをしたところで、僕の彼女への気持ちは治まらないのだから。

だから、“僕が本当にやりたいこと”が出来そうなところを探しているうち、進行方向に、見慣れた姿を見つけて了。僕は、バイクの速度を緩めた。

「おい、お前、タダシだよな？」

そこは、道の途中にあつた短いトンネルの中だつた。その見慣れた影は、壁に背中をくつつけたまま、座つて下を向いていた。けれど、着ている制服が僕の学校の制服だし、髪型も完璧に見慣れた腐れ縁・タダシだつた。

「……あ、お前か。嫌な所に現れるやつだな、お前」

タダシだつた。下を向いていたタダシは僕の声に反応して、僕の顔を眺めた。

けれど、その顔を一目見るなり、タダシに何事かがあつたことが判つた。

トンネルの中というロケーションのせいでよくは見えなかつたけれど、目が充血していたし、鼻水もだらしなく垂れていた。そういうえば、声が震えていた。まるで、これは……。

僕のモノローグよりも早く、タダシは答えを言った。

「はは、さつきのお前と、一緒だな」

自嘲の後には、涙がついてきた。涙を拭おつともせず、しかも鼻水をかもうともせず、タダシは続けた。

「俺さ、付き合つてた女がいたんだ。でも、今日、振られちまつた。

“アンタみたいな頭の軽い男は嫌い”だつてさ。ははは、笑わせるよな、頭が軽いのは、お前も一緒だろ、ってなもんだ。でもさ、俺、俺え……」

所々、声がしゃくつていて。けれど、構いもせずに続けた。

「それでも、アイツのことが好きだったんだよなあ……。それでも、じゃないか。そんなところも、俺は好きだった。バカだったけど、でも優しいやつだったし、可愛いやつだった。なのに……、なのに……」

まるで、振られた直後の僕のように、タダシは泣いた。

そんなタダシの姿を見ながら、僕は気づいた。

恋愛で痛みのないヤツなんて、どこにもいやしないんだ。ただ、皆その痛みを口にしないだけで、皆傷ついて、つらい体験をして、それでも人は恋をするんだ。

それに気づいた瞬間、タダシが急に身近に感じられた。僕の恋愛を「昭和な考え方」と僕を馬鹿にしていたタダシだつて、「昭和な考え方」をしてたんじゃないかな。

けれど、不思議と反発は感じなかつた。むしろ、（不思議な表現だけど）可愛らしささえ感じてしまった。

「おい、タダシ」

僕はバイクに跨つたまま、声をかけた。

「……なんだよ」

「その彼女、アルバイトやつてるのか？」

「あ、ああ……」タダシは鼻をすすりながら答えた。「コンビニで、レジ打ちのバイトをやつてるけど……」

「今日は？」

「ああ、今頃もうレジ打ちしてるはずだよ  
「なるほど」

僕は、二カつと笑つた。

「おい、お前、そんなに性格が悪いヤツだつたか！？」

バイクの後ろに跨るタダシは、僕に言つた。そう指弾された僕は、あえて反論しなかつた。

夜の街が、どんどん後ろに流れていく。光と闇のコントラストが、

キレイだった。

「まさか、振られたその日に、振られた子が働いているコンビニで、エロ本を買わされるとは思ってなかつたぞ！」

そう。僕は、タダシに提案したのだ。

“その子のコンビニに行こうよ”と。タダシはちょっと悩んだけれど、首を縦に振った。そして、そのコンビニの前に着いた瞬間、こう言い放った。“じゃあ、あそこでエロ本を買ってきて。あの子の前で”と。もちろん、最初は意味がわからない！と噛み付いてきたけど、“僕も同じことをしたんだ”と、さつき買ったエロ本をチラツと見せて、よつやく諦めたように店内に入り、そしてエロ本を買つてきた。

バイクのアクセルを握りながら、僕は反論した。

「でもさ、結構楽しかったでしょ？ 好きな人に、エロ本を売つてもうつの」

「……いや、まあ……」

まんざらでもありませんがね、といった声色で、タダシは呟いた。そしてそのまま僕へ噛み付かなくなつた。きっとタダシも、彼女にささやかな復讐を果たしただろうから、その快感に気づいたのだろう。僕へ噛み付く代わりに訊いてきた。

「なあ、これから、どうするんだ？」

「そうだなあ、実は、何かを燃やしても大丈夫そうなどこかに行きたいんだけど」

「は？ 燃やす？」

「どこか、無いかな？」

「そうだなあ」

タダシは何かを思い出すよつこ、言葉を夜の街に踊らせた。

そういえば、とタダシは言った。

「いいところ、思いついたよ」

タダシが示したのは、河川敷の、大きな橋の下だった。

まったく、タダシはクレバーなヤツだ。“何かを燃やす”と言つただけで、それが人に見られたらマズイ、とか、水が近くにあつたほうが安全とか、そういう僕の言葉の背後にあるモノを一気に先読みして、河川敷を示した。もはや宵闇に覆われた河川敷には人っ子一人見えないし、近くには川、という水もある。

「へつへ、ここなんか、お前のお眼鏡に適うと思うんだが？」

「いいね」

僕はバイクを止め、降りた。タダシも、それに続く。

「で」タダシは僕の背中に訊いた。「これから、どうするんだ？」

僕は、ポケットをまさぐつた。そして、バタフライナイフを手に取ると引き抜いて、片手で刃を出した。バタフライナイフの、俗に“バタフライアクション”と言われる開き方は、闇によく映えた。けれど、その行動をタダシは別の意味に取つたらしかつた。

「おおおお、お前、いくら振られたからって、腹いせに俺を刺す気か！？」

「バカ」

僕は、左手に持つていたエロ本のビニール袋を、バタフライナイフで裂いた。そして、そのエロ本の封印をナイフで切り取ると、ナイフを逆手に持ち直してその切つ先をエロ本に突き刺した。その様子を、意味が判らない、とでも言いたげな顔をして、タダシが見守つてゐる。

「お、おい？」

むしろ恐れ半分に訊くタダシ。僕は可笑しくなつて、さらにエロ本をビリビリに切り裂く。エロ本で素敵な肢体を晒しているお姉さんも、ビリビリに破け、スッパリと斬れていた。

わざと、エロ本の上にバタフライナイフを突き刺してから、僕は言つた。

「いや、これが僕なりの、彼女へのお別れなんだ」

「は？」

判らない、といつ口調で、タダシが頓狂な声を上げた。僕は続け

た。

「好きだった人から買ったエロ本を、一回も実用に供さずにバラバラに切り裂く。これ以上に彼女とのお別れになることってあるかい？」

「……いや、どうだろ？」「

顔をしかめながら首を傾げるタダシに、僕は遂に噴き出した。そして、種明かしをしてしまった。

「いや、実は、僕だってなんでこんなことをしたくなつたのか、判らないんだ」

「え？」

「今日、家に一人、ベッドで寝転んでたら、エロ本をナイフでビリに裂いてそれを盛大に燃やす、っていうイメージが浮かんでさ。それで、

いや、正確には、イメージ、なんて柔なものではなかつた。むしろ、まるで強迫観念のように僕に迫つてくる、それこそ砂漠の真ん中で咽喉が渴いて水を欲するような、本能に裏打ちされた感覚だつた。そして、その感覚に襲われてからずつと、僕は本能のままに行動していたというわけだ。

「実行しようとしたわけか

タダシの問いに、僕は頷いた。

「いやあ、我ながら、変態的なイメージだなあ、って思つたよ。でも、どうせヒマだし、それで気がまぎれるなら面白いかな、って思つてさ。やつてみようって思い立つたわけ。まったく、バタフライナイフを買っておいて良かつた。何かの役に立つんじゃないかな、って思つて以前に通販で買つたんだけど、正解だつた

「まさか、そんな役の立ち方とはな」  
タダシの言い分に、僕は笑つた。

「でもまあ、楽しいよ？」

「……なあ

小さい声で、タダシが声を上げた。

「何？」

「いや、あのセ……」

言いくぐそうこ、タダシはもじもじとしている。

「何？」

僕はあえて、先回りをしない。タダシからの言葉を待つ。タダシは、しばらくモゴモゴと口を動かしていたが、口を開いた。

「俺にも、やらせてくれないか」

その言葉を、僕は待っていた。だから、バタフライナイフを工口本から抜き取つて一旦折りたたんでから、タダシに投げ遣つた。

「ほら、使いなよ。僕はもう、満足したから」

結局この後、僕ら一人は工口本をビリビリに裂きまくつた。抉つて、斬つて、裂いた。途中、タダシが感慨深そうに、「まさか、モデルになつてるお姉さんも、こういう風に自分の写真が使われているとは思わなかつただろうな」と言つたのには笑つた。確かに、まさか本来の目的にも使われないままにビリビリにされるなんて、モデルのお姉さんからすればまさに晴天の霹靂だらうし、脱ぎ甲斐もないのではないだろうか。

そうして、ビリビリの細切れになつた工口本が、僕らの足元に溢れた。すたすたになつたお姉さんたちの写真が、僕らのことを見ていた。それを僕らは一つにまとめ、山のようにした。それを、嬉々とした顔で見下ろすタダシ。きっと、僕も似たような顔をしているのだろう。

「で、どうするんだ？」

子供みたいに目をキラキラさせて、タダシは僕に訊いてきた。決まつてゐるだろ、とばかりに、僕は胸ポケットからマッチを取り出した。

「これを、燃やす」

「おい、これ、俺にやらせてくれないか？」

タダシはそう提案してきたけれど、さすがにそれは譲れなかつた。「いや、これだけは譲れないな」

ちえ、と唇を伸ばすタダシを尻目に、僕はマツチを擦つた。瞬間、シユポ、と燐部分が光り、赤い火が灯つた。赤い火は、弱い風に吹かれてちょっと揺れた。

そのマツチを、僕はエロ本の細切れの山に投げ入れた。最初は、煙るだけだつた。でも、そのうち、煙が大きくなつていき、赤い炎がちよろつと顔を出してきた。もつすこし待つと、その小さな炎が風にあおられ、大きくなつていつた。

「おお！」

タダシが声を上げた。

その炎は、さつきまでエロ本だつたはずの紙ぐずを、容赦なく焼いていつた。そのついでに、炎の熱が僕の頬を軽く撫でていく。なんだか、キャンプファイアーのようだ。

タダシは燃える炎を、まるで甲子園の応援をする応援団長のよう両手を上げて、どういう風にも聞き取れない大声を出して応援していた。応援したところで火が大きくなるわけがないことくらい、タダシにだつて判つているだろう。でも、タダシはこうやって心中に居座つている女の子にお別れしているのだろう。いや、もしかすると、そういう性質のものですらないのかもしれない。タダシはきっと、騒がねばならなかつたのだ。そして、僕もまた、こうして騒がねばならなかつたのだ。理由というのは、常に後付のものなのだ。今はエロ本を燃やすというお祭りなのだ。祭りの意義なんて、偉い学者の先生が決めればいいことだ。

僕も、タダシと一緒に叫んだ。心なしか、火が大きくなつた気がした。

きっと僕は、と、まるでキャンプファイアーのよつに燃え盛り始めた炎を眺めながら、ふと思つた。

きっと僕は、もう、彼女のことを恋しく思うことは無いのだろう。そして、彼女のことを思い出そうとしても、きっとこのかがり火のようなエロ本のことを思い出して、ただ笑うのだろう。そして、「若かったんだな、僕も」と、ありきたりな事を言つて苦笑いして、

記憶の本棚にそっとしまってしまったのだ。ひい。

「さよなら」

橋にぶつかって、ちょっとここにびつて空に向かって、元通りに僕はよくな

まうと言った。

まるで手を振るよつて、炎が揺らめいた。

## (後書き)

この駄文のジャンルを「文学」としておりますが、これはあくまで「あえて」の分類であることを「容赦ください」。

あと、この駄文には各種犯罪行為が書かれていますが、この駄文のマネをして警察等の御厄介になることになつても矢車は一切関知いたしませんので、真似をしないようにお願いします。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5418e/>

---

エロ本焼却祭り

2010年10月8日15時43分発行